1．科目名（単位数）	上級社会福祉研究法　（4 単位）	3．科目番号	SSMP7208
2．授業担当教員	大島　一成、大山　勉、金　貞任、先崎　章、田中　喜美子、尹文九		
4．授業形態	演習形式	5．開講学期	通年
6．履修条件・他科目との関係			
7．講義概要	現代社会では、社会福祉の諸課題が広範囲に顕在化しており、グローバル視点を備えた研究者および高度専門家の育成が求められている。社会福祉博士論文では、社会福祉の現状・事実を発見し、これらのニーズに対応できるように多面的・学際的アプローチを取り入れた分析、社会福祉施策や実践の実証的な評価、検証を行い新たな施策や実践のモデルを提示することが求められている。研究論文はレポートに似た作業で作成されるが、理論の応用と結論の独自性などが重要である。 この講義では、博士論文を作成するために必要な研究方法を発見することを目的とする。そのために、各種研究方法論の概略と具体的な研究の事例を多方面・多角的に紹介する。具体的には、博士論文の書き方、各研究テーマに適切な社会福祉と家族社会学理論、ソーシャルワークにおける量的研究の多変量解析と事例研究の方法として KJ 法、グラウンデット・セオリー、シングル・システムなどを学習し応用を目指す。 博士課程での研究は、院生自身の問題意識に従って、社会福祉現場での課題を解決するために行われる活動であり、課題を解決するための検討を繰り返していく中で幅広い視点や探索的な分析により的確な解決方法を発見し、既存の視点などを再構築することを目指す。研究者としてのキャリアの形成のために、適切や研究方法を応用し、自分自身の専門領域を確立するために研磨する。		
8．学習目標	1．博士論文の書き方の理解 2．社会福祉に関連する理論の学習と応用 3．先行研究の批判的検討と問題点の抽出、仮説を作成する能力 4．応用科学としての社会福祉専門職の理解 5．量的研究法と質的研究法の長所と短所の理解 6．批判的考察と今後の課題の抽出		
9．アサイメント（宿題）及びレポート課題	毎回提示された本や論文をレビューすること、論文の作成と効果的プレジェンテーション方法		
10．教科書・参考書・教材	【教科書】 担当教員が毎回授業で本や論文などを提示する。 【参考書】 ・平山尚、武田丈、藤井美和、『ソーシャルワーク実践の評価方法：シングル・システム・デザインによる理論と技術』中央法規、2002 年。 ・アメリカ心理学会（APA）. Publication Manual of the American Psychological Association (『第 2 版論文作成マニュアル』), 医学書院、2011 年。 ・Henry E. Brady and David Collier, eds. 2009. Diverse Tools, Shared Standards(『社会科学の方法論争』)勁草書房 ・野々山久也ほか、『家族社会学の分析視角』ミネルヴァ書房、2001 年。 ・高坂健次など『講座社会学　理論と方法』東京大学出版会、1998 年。 ・森山和夫『社会学の方法的立場』東京大学出版会、2013 年。 ・ 斎藤嘉孝、『社会福祉調査－企画・実施の基礎知識とコツ』新曜社、2010 年 ・川喜田二郎『発想法』中公新書、1967 年。 ・Allen Rubin & Earl R. Babbie, 2018. Research Methods for Social Work. CA: Brooks/Cole. ・Martin Bloom, Joel Fischer, & John Orme, 1999 Evaluating Practice, Guidelines for the Accountable Professional, Boston: Allyn & Bacon. ・Dean Hepworth, Ronald Rooney, & Jo Ann Larsen, 1997 Direct Social Work　Practice: Theory and Skills, Pacific Grove, CA: Brooks/Cole ・Tony Tripodi (1994). A Primer on Single-Subject Design for Clinical ・Social Workers. Washington D.C.: NASW Press.		
11．成績評価の規準と評定の方法	○成績評価の規準 学習目標を基準として担当教員 4 名が授業中発表・課題を評価する。小論文ではテーマをよく理解し、適切な方法をとり、深いレベルで論じられているかを基準とする。 ○評定の方法 成績の評価は、本や論文のレビューと発表、論文の発表によって決める。 小論文１　　：20% 発表・授業中課題：80%		
12．受講生へのメッセージ	本大学院は、将来の日本の社会福祉専門職の教員や指導者を養成することを目指している。本学の博士論文の基準は、学会雑誌に出版する必要があり、なおかつ、世界的視野からみても上級レベルが求められている。研究法の習得は、福祉専門職の知識と技術の発展に欠かすことができない分野である。全力を尽くし、学習に専念することが求められる。		
13．オフィスアワー	別途通知する。		

14．学習の展開及び内容【テーマ，学習の目標，学習の内容，キーワード，学習の課題，学習する上でのポイント等】

1～2．テーマ	論文の作成、論文の構成と内容について　（金）
【学習の目標】 【学習の内容】	・論文の種類と論文の記述に関して議論する。 ・効果的な論文の作成を吟味する。 ・論文の構成と論文の内容を効果的に示す方法を議論する。 ・論文の種類について学習する。 ・論文発表の倫理基準、科学的知識の正確さ、引用文献を表記する理由について探求する。 ・論文を構成するセクションと内容を学習する。

【キーワード】 【学習の課題】	論文の種類、科学的知識、論文の構成、引用文献 各自の論文の構成と内容を探索的に探る。
3～5．テーマ	理論の応用とプレジェンテーションについて　（金）
【学習の目標】 【学習の内容】 【キーワード】 【学習の課題】	・博士論文を作成する時、理論を用いる重要性を学習する。 ・学会での口頭発表・論文審査の時などプレジェンテーションの方法について探求する。 ・高齢者を対象とした論文では、どのような理論が用いられているかを探る。 ・論文の作成の時、理論を用いる意義について探求する。 ・プレジェンテーションのためのパワーポイントの作成について学習する。 ・プレジェンテーションは、どのようにすれば効果的であるかを議論する。 ・論文を発表する。 理論の応用、博士論文、論文審査、プレジェンテーション ・高齢者を対象とした論文では、どのような理論が応用されているかを学習する。 ・プレジェンテーションの長所と短所について学習する。 ・パワーポイントの作成の時、気を付けなければならない点について学習する。
6～7．テーマ	医療・保健分野の研究手法を社会福祉分野の研究に生かす（先崎）
【学習の目標】 【学習の内容】 【キーワード】 【学習の課題】	・①博士論文の書き方の理解、②社会福祉に関連する理論の学習と応用、③先行研究の批判的検討と問題点の抽出、仮説を作成する能力、④量的研究法と質的研究法の長所と短所の理解、⑤批判的考察と今後の課題の抽出 ・量的研究の前提となる概念の操作的定義・分析・考察の展開について、医療・保健分野を例に学び取る。 ・質的研究の手法となるインタヴュー調査について、症例報告を例に学び取る。 ・（講義の際の教材は、各回プリントで配布する。） 研究プロセス、仮説検証、研究デザイン、実践研究、介入研究、質的研究、量的研究、統計解析 修士課程で学習し実践した内容をさらに発展させる。
8~10．テーマ	精神保健医療福祉領域における研究法の系譜（先崎）
【学習の目標】 【学習の内容】 【キーワード】 【学習の課題】	・社会福祉学における「根拠に基づく実践」(evidence based practice:EBP)は、医学における evidence based medicine(EBM)から派生したものである。後者に対する反立として narrative based medicine(NBM)の流れもある。それぞれを量的研究と質的研究に対応させながら、両方の流れに通底する研究の実際を学ぶ。 ・最近 5 年間の（社会）精神医学誌、リハ医学誌、社会福祉関連の学術誌に掲載されている原著論文から ・博士論文レベルで上記①～⑤の事項について学べる論文を、各回、数編選び紹介、方法や工夫について学ぶ。 ・（講義の際の教材は、各回プリントで配布する。） 精神保健、高齢化社会、リハビリテーション、地域包括ケアシステム、医療、社会福祉 ・最近の社会福祉関連博士論文の水準について、十分に把握する。
11～12.テーマ	リサーチクエスチョン設定の背景にある社会福祉の観点（大山）
【学習の目標】 【学習の内容】 【キーワード】 【学習の課題】	リサーチクエスチョンを立てる際の社会福祉の観点を意識し明確化する。 研究論文における研究上の問い（リサーチクエスチョン）は、論文構成上大きな意義を持つ。その背景にある社会福祉の価値、理論、観点などを言語化し、論文全体に貫くことを演習を通して体感できるような内容とする。 医学モデル、社会モデル、ノーマライゼーション、生活の質（QOL）、Evidence Based Practice 各自の現時点での論文のテーマおよびリサーチクエスチョンについて、発表し受講者がその内容についてディスカッションを行うことを通じて、上記の観点を意識し明確化する。
13～15.テーマ	博士論文の研究デザインを構想する（大山）
【学習の目標】 【学習の内容】 【キーワード】 【学習の課題】	リサーチクエスチョンを明らかにするために必要なデータは何か、またデータ分析の方法を理解する。 各自の論文テーマに対して研究デザインを構想する。 研究デザイン、質的研究、量的研究、ミックス法 参考図書：John W. Creswell 著『研究デザイン　－質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会 2007 年の読み合わせを行い、その後各自またはグループで論文テーマに対応した研究デザインを構想し発表する。
16～17.テーマ	学問と博士論文の位置付け　(尹)
【学習の目標】 【学習の内容】 【キーワード】 【学習課題】	各国によって学問、特に博士論文に関する意味、規定や条件などが異なっているが、日本での博士論文の位置付けを理解する。 ①学問と研究とはないか　②社会科学という学問の中で社会福祉学の位置付けと社会福祉学の特徴と研究領域 ③博士論文の構成と書き方　④応用学問として社会福祉学の理解 学問、研究アプローチ、博士論文、応用学問 博士論文を理解してから興味あるテーマを考える。
18～20.テーマ	博士論文の実際とジャーナル　アーチィクルとの違いについて　(尹)
【学習の目標】 【学習の内容】 【キーワード】	博士論文の中でマクロ、ミクロ研究の違いついて、そして博士論文を完成させるためには実際何が必要なのかについて理解する。 ①マクロ、ミクロ研究とは　②政策研究の意味　③博士論文の章立てとは　④高齢者福祉政策の重要性について ⑤博士論文とジャーナル　アーチィクルとの違いについて マクロ、ミクロ研究　政策　章立て　政策転換
２１．テ ー マ	社会福祉実践の評価、または、効果測定とは何であるか、なぜ必要としているのかを修得する。　（田中）
【学習の目標】	専門職として発生してきた実践評価の課題に関して、社会福祉専門職としての歴史的発展段階から分析を加え、科学的実践的意味を解明する。実践評価が必要な理由を解明する。社会福祉実践の評価、効果測定、シングル・システム・デザインとは何か、なぜ必要であるかを学習する。

【学習の内容】	・実践評価、または、実践の効果測定の意味、目的とは何かについて学習する。 ・実践評価の中で最も科学的程度が高い集団比較実験調査研究法とシングル･システム･デザインとを比較検討する ・実践評価と実践の統合化は、いつ、どのような理由で起こったのか、底辺にある理由を学習する。 ・シングル・システム・デザインの主要要素について学習する。
【キーワード】	実践評価、実践の効果測定、個人情報と調査倫理、シングル・システム・デザイン
【学習の課題】	・集団比較実験調査計画法を社会福祉実践に応用した場合に、どのような問題が起こるか。実践面と調査・研究面から吟味する。 ・シングル・システム・デザインの実践に応用した場合、長所と短所を明確に記述する。
22～23.テーマ	集団比較実験調査計画法の主要概念、ランダム化された治験を学習し、シングル・システム・デザインと比較検討し、類似点と相違点を明確にする。　（田中）
【学習の目標】	シングル・システム・デザインの実践への応用の第一歩として、クライエントの提出する問題の特定化と目標の設定が行われる。問題・目標を漠然とした概念から、具体的な概念にするという過程が含まれる。問題の特定化とは、まず、概念の操作定義をする必要があり、次に、測定、または、客観的に観察できることである。実践のインテークの段階をシングル・システム・デザインでは、基礎線（ベースライン）と呼び、アセスメントの結果、選択される介入と区別している。ここでは、実践の過程と評価の過程を比較しながら、効果測定方法の理解が期待される。
【学習の内容】	・問題の特定化と目標設定の過程の理解と実行を試みる。 ・基礎線（ベースライン）と介入の明確な定義と区分について学習する。 ・概念の操作定義を学習する。 ・測定とはどのような意味か、客観的観察とはどのような意味があるか学習する。 ・シングル・システム・デザインを実践に応用する過程を理解し、実践する。
【キーワード】	集団比較実践調査計画法、ランダム、基礎線（ベースライン）、介入、実践過程、概念定義、操作的定義、客観的観察、問題の特定化、目標設定
【学習の課題】	・事例を使用して問題の特定化と目標を具体的に設定する。 ・実践を基礎線（ベースライン）期間と介入期間に分けて、実践の過程を考察する。 ・クライエントが提出する問題の特定化について、問題の理解と実行を試みる。 ・クライエントが提出する問題に関して、漠然とした問題から測定できる問題に記述できる技術を学習する。
24～25.テーマ	質的研究法（KJ 法、SCAT(**S**teps for **C**oding **a**nd **T**heorization)法、M-GTA(Modified Grounded Theory Approach)、エスノグラフィー調査法、会話分析法など）で書かれた論文を読みながら種々の質的研究法を概観する。　（田中）
【学習の目標】	質的研究法の KJ 法・SCAT(**S**teps for **C**oding **a**nd **T**heorization)・M-GTA(Modified Grounded Theory Approach)・エスノグラフィー調査法・会話分析法などで記述された論文を読みながら社会福祉に有用な種々の質的研究法を理解する。
【学習の内容】	・質的研究法とは何か、KJ 法・SCAT(**S**teps for **C**oding **a**nd **T**heorization)、M-GTA(Modified Grounded Theory Approach)・エスノグラフィー調査法・会話分析法などの特徴・主な概念、段階あるいはプロセスなどについて学習する。 ・質的研究法に基づいて書かれた論文を通して、質的研究方法を学ぶ。
【キーワード】	叙述化、図解化、現象の構造化、発話内容の「テクスト」記入、4 ステップコーディング、カテゴリーのグルーピング、ストーリー・ライン、理論記述
【学習の課題】	・ブレインストーミングと KJ 法：多くの意見・アイディアをグループ化し、論理的に整序して問題解決の道筋を明らかにする。 ・SCAT 法の発話内容の「テクスト」記入、ステップコーディングに関して学習する。 ・M-GTA 法のカテゴリー・グルーピング、ストーリー・ライン形成に関して学習する。
２６．テ ー マ	ストラウスとグレーザーによる「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」（大島）
【学習の目標】	急速な社会変動によって、これまでの演繹的方法（既存の理論モデルから研究の設問と仮説を導き出し、それらを実証的データと比較し検証する）は、研究対象の多様性に十分に対応できなくなった。それゆえ、質的研究への関心が高まっているが、ここでは、その代表とも言える。Grounded Theory Approach をとりあげ、批判的に吟味してみる。
【学習の内容】	１．シカゴ大学でフィールドワークを学んだ Straus とコロンビア大学で統計的手法を学んだ Glazer がカリフォルニア大学看護学科で一緒になり、この方法に基く『死のアウエアネス理論』という記念碑的名著を結実させた。 ２．この方法がもっとも適合するのは、研究対象とする現象がプロセス的性格（始まり、展開し、終わっていく）をもつヒューマンサービス領域であり、人間と人間とが直接的にやりとりする社会的相互作用を理論化できる。
【キーワード】	作業項目：研究テーマ、分析テーマ、分析焦点者、ワークシート（概念生成）、カテゴリーとコアカテゴリー、結果図とストーリーライン、グラウンデッド・セオリーの記述 分析の機能項目：継続的比較分析、理論的サンプリング、理論的メモ（ワークシート内）、理論的メモ・ノート、理論的飽和化、理論的センシティビティ、感受概念(sensitizing concepts)
【学習の課題】	この方法にはいくつかのヴァージョンがあり、本邦では木下康仁による（データの切片化をしないで、ワンスポット型の研究に適する）修正版が多く用いられているが、原版に立ち戻って、その核心を把握してみよう。
【参考文献】	Ｂ．Ｇ．グレイザー、Ａ．Ｌ．ストラウス著（木下康仁訳）『死のアウエアネス理論と看護』医学書院、1988 年 Ｂ．Ｇ．グレイザー、Ａ．Ｌ．ストラウス著（後藤隆ほか訳）『データ対話型理論の発見』新曜社、1996 年 木下康仁編著『分野別実践編　グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂、2005 年 木下康仁著『ライブ講義 M-GTA：実践的質的研究法』弘文堂、2007 年 木下康仁著『グラウンデッド・セオリー論（現代社会学ライブラリー17)』弘文堂。
27～28.テーマ	フーコーのコレージュ・ド・フランス就任講演「言説の秩序」を読み解く（大島）
【学習の目標】	数ある質的研究法のなかでも最先端と言えるのがフーコー派言説分析(Foucauldian Discourse Analysis)であり、社会心理学を皮切りに、すでに社会福祉学への応用も始まっている。その端緒となったフーコーのコレージュ・ド・

フランス教授就任講演「言説の秩序」（邦訳あり）を詳細に読み解き、その現代的意義にふれてみる。

【学習の内容】 １．フーコーの仕事は、狂気、倒錯、刑罰などをめぐって西欧の知の深部を照射するものであったが、ここでは、その哲学的含意にはあまり立ち入らずに、あくまでもひとつの「社会理論」として読んでみることを奨める。
２．なぜ彼はラング（言語）やパロール（言葉）ではなく、ディスクール（言説）を問題にしたのか、なぜエノンセ（言表）という用語によってそれを基礎づけたのか、このことを理解することが出発点になる。

【キーワード】 外的な排除のシステム（禁止、狂気、真理）、内的な排除のシステム（注釈、作者、学問）、適用の限定条件（儀式、学説、教育）、言説、言表、出来事

【学習の課題】 １．若きフーコーは精神病院のなかで、医者でも患者でもない立場から事態を見据えたのであり、このことが彼をして「狂人の発話」をも排除することなく、しかるべき場所へと位置づけうる言説分析の手法を確立せしめた。
２．本テーマについての学習は、現代の精神保健福祉におけるキーワード「リカバリー」（障害があろうとなかろうと自分の人生を取り戻す）を単なるスローガンに終わらせないためのひとつの努力であると考えられたい。

【参考文献】 M. フーコー（慎改康之訳）『言説の領界』（河出文庫）、河出書房新社、2014 年
C．ウィリッグ著（上淵寿ほか訳）『心理学のための質的研究法入門―創造的な探求に向けて』培風館、2003 年
美馬達哉著『生を治める術としての近代医療―フーコー『監獄の誕生』を読み直す』現代書館、2015 年

【学習する上での留意点】 グローバリゼーションおよびＩＴ革命の進展によって、われわれの学問の地形は今や一変している。かつて聴衆に眩暈をもたらしたフーコーの斬新な構想は、現代においてこそ、格別のリアリティーを獲得し始めているように思う。

29～30.テーマ	DSM の診断の妥当性とその限界　多文化精神医学、民族精神医学の相補主義の立場から（大島）

【学習の目標】 1. 精神医学特論で学習した DSM-Ⅳから DSM－5 に至る診断概念の変遷を確認・理解する。
2. DSM 診断の妥当性について、いくつかの疾患について多文化精神医学の観点から検討する。
3. 一つの理論から臨床的事象を説明することの限界から　二つの理論を使い分ける相補主義の考え方を知る。

【学習の内容】 DSM-Ⅳは、診断の信頼性が高いため、精神科領域の国際的研究では広く用いられてきたが、その妥当性について（例えば生物学的マーカー、治療反応性など）検証中であるが、精神保健医療福祉の共通言語としての有用性から、ICD-10 とともに用いられてきた。DSM-5 は、カテゴリカルからディメンジョナルな分類へとシフトしつつあり、精神医学が岐路に立たされていることを告げた。
例えば DSM－5 における PTSD は民族精神医学の視点からは別の捉え方をすることが可能である。デンマークの物理学者 N.ボーアは「電子の位置と速さ、光の粒子性と波動性など二つの量が観測者の影響から同時に測定できない関係にある現象」について相補性という概念を提唱し、互いに排他的な性質を統合し、相互に補うことで初めて系の完全な記述が得られると認識論に拡大した。G.ドゥブル―は、相補性を精神医学にも導入し、二つの文化が衝突するときの症状発現を原文化に所属する患者と西欧モデルの治療システムの二重性を問題にし、民族精神医学を提唱した。その後継者、T.ナタンは、「いくつかの生の事実が二つの言説（民俗学的、心理学的）を引き出す」ことに着目し、この二つの言説は、「同時にとらえることができないこと、またこの特異性が生の事実からではなく、それを説明しようとする科学的手続きに由来していること」を G. ドゥブル―は示している、とナタンは論じた。民族精神医学はその基本的手続きのなかに二重性と境界の概念を含んでおり、二つの異なった精神分析と人類学という言説を使いこなすことを前提にしており、さらに、明確に境界を定められた領域ではなく、領域の限界を探索し研究対象とする点が独創的であるとナタンは主張した。本講義では、症例を提示し、相補性、二重性の臨床的問題を考察する。

【キーワード】 民族精神医学、民族精神分析、相補性、二重性、観測者

【学習の課題】 １．多文化における患者・ユーザーの訴え、要望、症状を二つの文化に所属するものとして相補的に理解することができる。
２．研究の主題を選び、研究方法を考えるとき、測定する事象が複数のシステムから由来しているのではないか、方法によっては観察者の影響が無視できないのではないか考慮し、アプローチを考えることができる。

【参考文献】 G.Devereux.la renonciation à l'identité.Editions Payot, Paris,2009
T.ナタン（松葉祥一他訳）『他者の狂気　臨床民族精神医学試論』、みすぼ書房、2005

【学習する上での留意点】 他者への好奇心を持ちながら、研究テーマを選んでほしい。